

■曾根俊虎 そねとしとら ・ ・ ・ ・ ・ 1847＝	米沢藩士から海軍軍人となり、興亜会の創立者になった、近代日本史におけるアジア主義の中の最重要人物。 米沢藩馬口労西之町で、代々上杉家家臣(馬廻組)務める曾根敬一郎の長男に生まれる。幼名は小太郎。 父は魯庵と号する儒者で、藩校(興譲館)の頭取をつとめ、かたわら私塾を開き、門下生には、米沢藩参謀をつとめる甘粕継成、雲井龍雄、宮島誠一郎らがいた。
ペリー来航 ・ 1853＝ 6歳：	
松下村塾 ・ ・ 1856＝ 9歳：	
桜田門外変 ・ 1860＝ 13歳：	
薩摩藩士密航 1865＝ 18歳：	父が頭取の藩校(興譲館)で漢学を学び、先輩の雲井龍雄に兄事、
明治維新 ・ ・ 1868＝ 21歳： 戊辰戦争終 ・ 1869＝ 22歳：	父に従い戊辰戦争に出陣、父が戦死して家督相続。雲井龍雄の“龍”に対する“虎”として、俊虎と改名。藩参謀甘粕継成に申し出て許され、雲井龍雄から「曾根小太郎を送る」の文を贈られて、江戸に出、慶應義塾に入り、福澤諭吉・吉田賢輔に洋学を学ぶ。理解者だった甘粕継成が過労で死去、雲井龍雄は新政府により鼻首になったことに衝撃を受ける。
廃藩置県 ・ ・ 1871＝ 24歳：	雲井処刑の責任者広沢真臣が暗殺された事件で、嫌疑を受け逮捕されるが、勝海舟・副島種臣・西郷隆盛らの支援によって許され、兵部省に入る。
学問のすすめ 1872＝ 25歳： 明治6年政変 1873＝ 26歳：	海軍少尉に任ぜられ、日清修好条規の批准書交換等の務をおびた特命全權大使の外務卿副島種臣に従い、判任随員として、*初めて清国へ渡る。帰国後、海軍省の本省勤務となり、中尉に昇任、
佐賀の乱 ・ ・ 1874＝ 27歳： 初の民間工場 1875＝ 28歳： 三つの内乱 ・ 1876＝ 29歳： 西南戦争 ・ ・ 1877＝ 30歳： 大久保暗殺 ・ 1878＝ 31歳： 琉球処分 ・ ・ 1879＝ 32歳：	台湾出兵で蕃地事務局に勤務後、大久保利通に随行して清国に出張(2回目)、 帰国し、「北清紀行」を著す。 清国に派遣され(3回目)、 おそらく台湾出兵時に合い知ることになった宮崎八郎が西南戦争で戦死。 帰国し、明治天皇に進講。 「清国近世乱誌」。日進艦員外乗組員として、清国に派遣され(4回目)、諜報活動に従事し、張滋昉から北京官話を教授される。帰国後、大尉昇任。金子弥平や広部精らと中国語教育を開始し、 *清国に派遣され(5回目)帰国。日本最初のアジア主義団体とされる(興亜会)を創立。欧米による支配の危機を訴え、志士・浪人の“先達”として名を馳せ、数々の憂国の右翼団体に関与して行く。
・ ・ ・ ・ ・ 1880＝ 33歳：	金剛艦員外乗組員として、清国に派遣され(6回目)帰国。朝鮮人渡来について専対員乗務。
明治14年政変 1881＝ 34歳： 新体詩抄 ・ ・ 1882＝ 35歳： 岩倉具視没 ・ 1883＝ 36歳： 秩父事件 ・ ・ 1884＝ 37歳： 帝国大学始 ・ 1886＝ 39歳：	「清国各港便覧」を著す。清国に派遣され(7回目)帰国、 「清国漫遊誌」を著す。清国に派遣され(8回目)、 天城艦に便乗して福州偵察に出、 *帰国。参謀本部海軍部編纂課長心得となり、上海に出張して帰国後、「法越交兵記」を記し、安南やアジアに対する政府の無関心な態度を批判して、伊藤博文と対立、
国民之友始 ・ 1887＝ 40歳： 初の対等条約 1888＝ 41歳： 帝国憲法発布 1889＝ 42歳：	筆禍事件によって罷免され、拘禁の身となるも、 無罪となったが、
大津事件 ・ ・ 1891＝ 44歳： 大本教 ・ ・ 1892＝ 45歳：	柴五郎によって、海陸併合の参謀本部で支那関係に最も精力を注いでいた人物の一人としてあげられるほどであったが、非藩閥どころか、米沢藩の出だったため、出世コースからは外され、 病を理由に海軍を退職。
日清戦争始 ・ 1894＝ 47歳： 日清戦争終 ・ 1895＝ 48歳： 白馬会 ・ ・ 1896＝ 49歳： 八幡製鉄始 ・ 1897＝ 50歳： 子規句歌革新 1898＝ 51歳： 田中正造直訴 1901＝ 54歳： 日露戦争始 ・ 1904＝ 57歳： 日露戦争終 ・ 1905＝ 58歳： 韓国反日暴動 1907＝ 60歳： アヲテ`創刊 ・ 1908＝ 61歳： 韓国併合 ・ ・ 1910＝ 63歳：	日清戦争となって帰国。この頃、ハワイからアメリカへの旅行もしたいらしい。 「日本外戦史」、 「露清の将来」。台湾総督府撫墾署主事から署長になるも、罷免・非職となり、 この年、日本に亡命してきた孫文の同志陳少白を介して、(八郎の弟)宮崎滔天と孫文との初対面を実現、 「俄国暴状誌」。 「東亜各港日本人職業姓名録・世界各国日本人職業一覧」、 体力が衰え始め、 動脈瘤のため、没した。 没後、「対支回顧録」が出版された。